福山市瀬戸町地頭分

地頭分溝渕遺跡見学会資料

地頭分溝渕遺跡（北西から）

平成２７年１２月１９日（土）

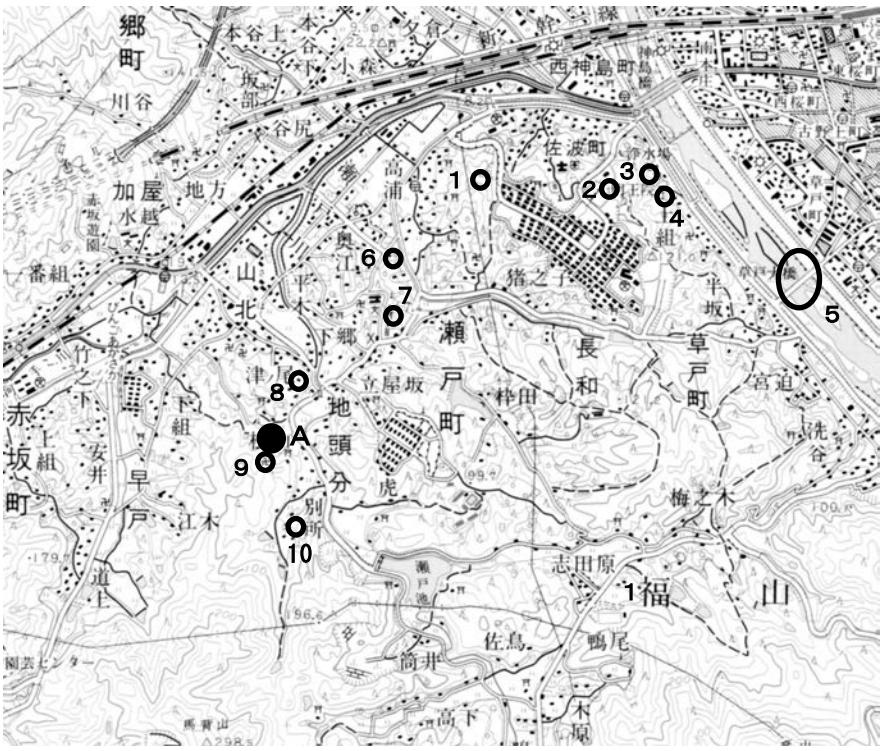
公益財団法人広島県教育事業団

福　山　市　教　育　委　員　会

１ 位置と環境

地頭分溝渕遺跡は，福山市街地から芦田川を隔て，西側に位置する瀬戸町の丘陵緩斜面に立地しています。本遺跡が所在する瀬戸町には，「長和（ながわ）」・「地頭分」・「別所」など当時の地名を残すものがあります。瀬戸町一帯は草戸千軒町遺跡の後背地で，中世荘園として有名な長和荘に含まれていました。長和荘の荘域は，瀬戸町長和に鎮座する承和元（834）年に豊前の宇佐八幡宮から分霊された福井八幡宮を総氏神としていた信仰圏から北辺は瀬戸町，神島町，佐波町で，南辺は田尻町の範囲と比定でき，芦田川に沿った南北に長い地域が推定されています。荘園内の年貢等の運搬ルートとして芦田川を使用していた可能性から，この長和荘と草戸千軒町遺跡には関連があることが指摘されています。また，「地頭分」は鎌倉時代，荘園領主と地頭との間での土地紛争の解決方法であった「下地中分」の遺名「別所」は荘園とは別に立てられた新しい郷（集落）や新田という意味があり，中世長和荘との関係を窺うことができます。

本遺跡の北には標高約 35ｍの石淵城跡，南に標高約 88ｍの中世山城の別所城跡が位置しており，別所地域には平安時代後期の木造阿弥陀如来坐像（県重文），室町時代中期の木造十一面観音立像（市重文），室町時代後期の木造阿弥陀如来坐像（県重文）が伝わっています。さらに東には国宝の本堂，五重塔を有する真言宗大覚寺派の明王院（みょうおういん）（もとは常福寺）や佐波城跡，的場山城跡，中山城跡など数多くの歴史的遺産が知られています。



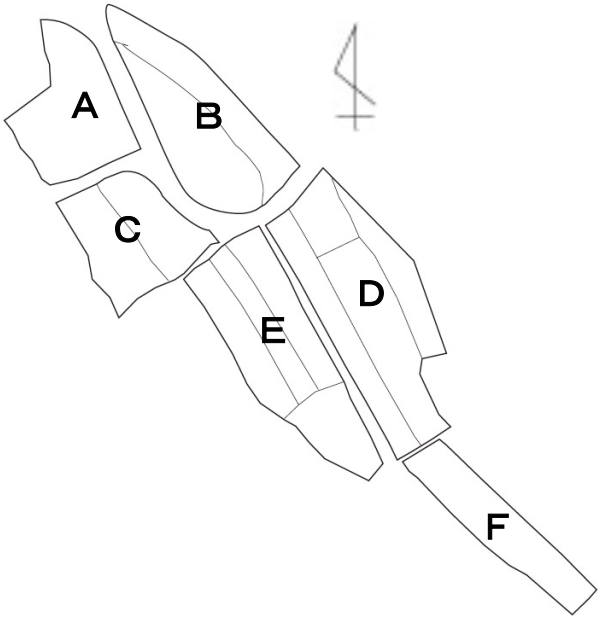
A 地頭分溝渕遺跡
1 的場山城跡
2 佐波城跡
3 草戸稲荷神社
4 明王院
5 草戸千軒町遺跡
6 片山城跡
7 福井八幡神社
8 石淵城跡
9 福成寺
10 別所城跡

地頭分溝渕遺跡周辺主要遺跡分布図（１：50，000）

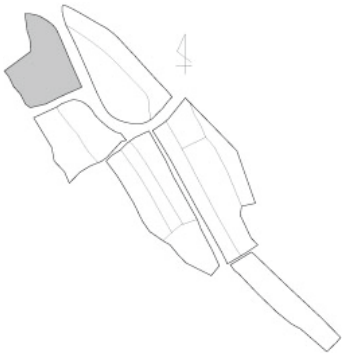
２　調査の経緯と調査区

今回の発掘調査は，一般国道２号改築（福山道路）工事に伴うものです。工事に先立って，福山市教育委員会が試掘調査を行なったところ，弥生時代から古墳時代・中世（鎌倉・室町時代）のものと思われる遺構や遺物を確認したため，本格的な調査を行なうことになりました。

調査面積は約 8,000　㎡で，調査区を水田ごとにＡ～Ｆ区の７つに分け，北側から順次，調査を進めています。



３　各調査区の概要



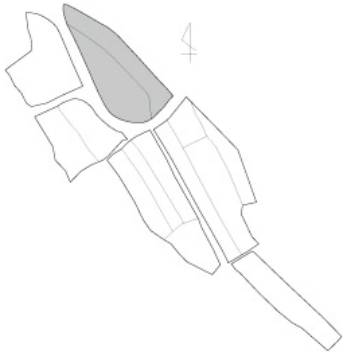
Ａ区

北東に位置し，溝状遺構，性格不明遺構（ＳＸ），柱穴などを確認しました。**ＳＸ１**は柄鏡（えかがみ）状の平面形で，細長い方形部では円形部との境に礫を積み，中央に立てた一対のレンガとの間には炭化物が充満していました。円形部南側の突出部では，礫を積んだ上に軒丸瓦（のきまるがわら）を架けており，煙道（えんどう）のような構造から窯的な性格が想定されます。

遺物は，土師質土器を中心に陶磁器・須恵器・瓦などの破片や近現代の物も出土しました。

▲ Ａ区の遺構

▲ ＳＸ１



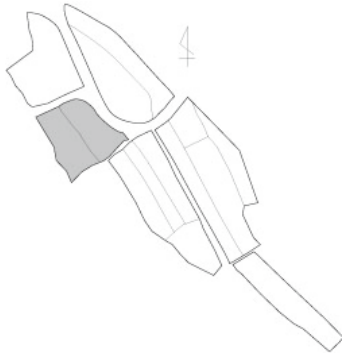
Ｂ区

北西に位置し，北部を中心に土坑（ＳＫ）３基，溝状遺構（ＳＤ）２条，性格不明遺構（ＳＸ）１基，柱穴などを確認しました。**ＳＫ１**は隅の丸い長方形状の平面形で，長さ 1.9ｍ，幅 1.1ｍです。**ＳＫ２**は平面形が円形で，礫が出土しました。**ＳＤ１**は幅１.5ｍですが，底面形状や埋土の土層断面から小さな溝を幾度も使用したものと判明しました。

遺物は，土師質土器を中心に陶磁器・須恵器・瓦などの破片が出土しています。

▲ ＳＫ１の掘り下げ作業

▲ ＳＤ１



Ｃ区

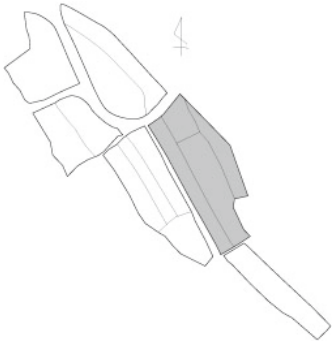
Ａ区の南側に位置し，上段を中心に掘立柱建物跡（ＳＢ）１棟，土坑（ＳＫ）６基，溝状遺構（ＳＤ）２条，性格不明遺構（ＳＸ）１基，柱穴などを確認しました。**ＳＢ１**は，等間隔で並ぶ柱穴列から１間×８間以上と考えられ，柱穴の一部に根石を据えていました。**ＳＤ２**は，東側に１間×２間で並ぶ柱穴列があり，建物に伴う溝の可能性があります。大型の**ＳＸ１**は自然流路と考えられます。

遺物は，**ＳＫ３**で須恵器の甕片，遺構内外で土師質土器を中心に陶磁器・須恵器・瓦などの破片が出土しています。

▲ ＳＫ３

▲ 根石を据えた柱穴

C区遺構配置図（1:200）



Ｄ区

Ｅ区の東側に位置しています。堆積土中から古代の円面硯（えんめんけん）・土師器・土師質土器などが出土しています。

現在までに，土坑（ＳＫ）４基・溝状遺構（ＳＤ）５条・性格不明遺構（ＳＸ）３基・柱穴などを確認しています。**ＳＤ１**は，東西方向に延びる溝状遺構で，底に横長の石を並べた状態で見つかりました。**ＳＸ１～３**は，土器溜りと考えられます。特に**ＳＸ１**は，古墳時代初期の甕が２個体分出土しており，それぞれ器形が異なる点が注目されます。**ＳＸ２**は，礫や焼土に混じって三つ巴文の軒丸瓦が出土しました。**ＳＸ３**は，ＳＸ１よりも新しい時期の土師器甕が出土しています。また，土師質土器椀や瓦器椀・火鉢が出土した柱穴もあります。

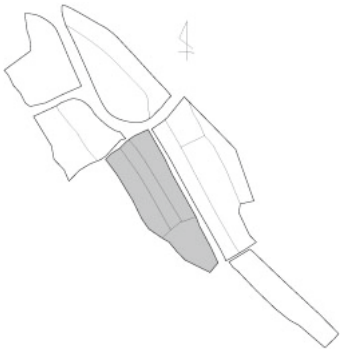
調査区内から出土した遺物は，他区と同様に土師質土器や須恵器，陶磁器などが出土しています。Ｄ区は遺構に伴った遺物もみられ，古墳時代初期から中世にわたって生活が営まれていたことがわかります。

▲ＳＤ１

▲ＳＸ１

▲ＳＸ２

▲ＳＸ３



Ｅ区

Ｃ区の南側に位置し，掘立柱建物跡（ＳＢ）１棟，土坑（ＳＫ）７基，溝状遺構（ＳＤ）12 条，性格不明遺構（ＳＸ）６基，柱穴などを確認しました。

ＳＢ１は山側に溝をもつ建物跡で，左右対称な間隔で柱穴が並んでいます。現状の規模は東西方向が約７ｍで，４間×１間以上であったと考えられます。

ＳＫ５は長方形状の平面形で，現状規模は１ｍ×0.8ｍです。削平により深さは最大 15 ㎝ほどですが，北西隅で土師質の小皿と椀がまとまって出土しました。**ＳＫ６**は円形の土坑で，須恵器甕の破片が多く出土しました。

ＳＸ１は，ほぼ床面のみが残存した建物跡で，床面では柱穴２本のほか，土坑５基が見つかりました。土坑内で大量の砕けた炉壁や羽口（はぐち）が出土したことから，最寄に鍛冶関連の作業場があったと考えられます。遺物は土坑内で土師質の椀や刀子，床面で希少な蔵鍵が出土しています。**ＳＸ３**は直径２ｍ以上になる大型の掘り込みで，下層で底面に窪みのある土師質の椀が出土しました。

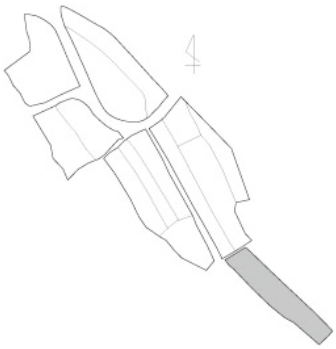
上記以外の遺物として，**ＳＤ４・12** で土師質の小皿が出土したほか，調査区内や包含層で土師質土器・陶磁器・須恵器・瓦などの破片が出土しています。これらの大半は土師質土器で，Ａ・Ｂ区に比べると陶磁器の出土量が少ない傾向にあります。なお，**ＳＸ２**付近で流れ込みとみられる鉄刀の柄部や銅製品の破片も出土しており，かつて上方に存在していた古墳が開墾によって失われている可能性もあります。

▲ＳＢ１

▲ＳＫ５から出土した土器群

▲須恵器甕が出土したＳＫ６

▲　ＳＸ１で出土した炉壁



Ｆ区

最も南側に位置する調査区で，現在調査中です。重機による表土はぎでは，住居状遺構や溝状の遺構，土坑，柱穴群などを確認しています。

４　まとめ

今回の調査では，掘立柱建物跡や土坑，溝状遺構を多く確認しました。出土遺物は土師質土器など中世の土器類が大半を占めており，中世を中心とした集落跡と考えられます。ただ，Ａ・Ｂ区は陶磁器の比率が他区よりも高いこと，建物跡や根石を含む柱穴がＣ～Ｅ区に分布することから，Ａ・Ｂ区では近世以降の遺構が多く，中世以前の遺構はＣ～Ｅ区など遺跡南半に集中しているようです。

出土した土師質土器は，草戸千軒町遺跡や瀬戸町を荘域の一部とする「長和荘」と併行する時期（鎌倉～室町時代）のものです。また，灯明皿（とうみょう）と思われる土師質の小皿や円面硯，青磁・白磁などの輸入陶磁器は，宗教施設や役所的な施設の存在を感じさせます。これ以外にも，弥生時代後期や古墳時代初期の甕，古墳時代中期の須恵器，平安時代の様相が窺える土師質土器など，時期幅のある土器類が出土しています。近辺に古墳の存在を想起させる鉄刀のほか，敲石（たたきいし）類などの石器も出土しており，今回の調査は原始・古代の遺跡が確認されていなかった当地域の歴史像を見直す契機になるでしょう。今後，遺跡の整理を進め，福成寺や草戸千軒町遺跡・長和荘との関連を解明していく中で，長きにわたり歴史を積み重ねてきた当地域の様相が明らかになっていくと思われます。

▲ Ｅ区ＳＫ５出土の土師質土器

▲ Ｅ区ＳＸ１出土の蔵鍵

▲ Ｅ区ＳＸ１出土の刀子

▲ Ｄ区出土の円面硯